聞名仏教

第 188 号　　毎月発行
（発行日）2026 年 5 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
http://nenbutsuji.info/
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行（ドイノリアキ）
記号・番号 17810-7-259431

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

仏法に生きる人

佐々木蓮麿

明治の中期、臼杵（大分県）の片田舎に椎原（しいはら）弥八という、武士かたぎの同行がおりました。

若い頃は生まれつき気性が激しい方でありましたから、どこまでも是々非々主義の強情さがあって、人から敬遠されていたのですが、一朝、聞法の道に入るや、その硬直な性格が仏法一途に向かったものですから、一方に自己の我情を仏の前にサンゲするとともに、他方においては、法のためには我を忘れるという風がありました。

そこで地方の聞信徒に対して毎年報恩講をつとめるように勧め、報恩講などの晩は、自ら近所の同行を誘うて参り、報恩講の行事が終わっても、夜を徹して談合（住職注、昔は朝方まで聞法することもあった）して、倦（う）むことを知らなかったということです。しかし、ときどき生まれつきの激しい気性がつのるので、そのたびごとに仏前に跪（ひざまず）き、涙を流してサンゲされたと聞いています。彼が晩年、口癖（くちぐせ）のように人に語ったことばは「仏法をいただかなかったら、人間に生まれた所詮がない」との一言だったそうですが、この一言に、彼の信境が現れていると思います。

この同行の熱心な引き立てによって、その地方を世間から「北津留（弥八さんの地方）の拝みたおし」と言われるほどに仏法が流布し、今日なおその余徳が残っているのであります。

その弥八同行の娘に、シズという女同行がおりましたが、この同行がまた親に勝るとも劣らぬ聞法者で、若い頃から父の薫陶（くんとう）をうけ、臼杵町に嫁いでからも、多くの子女を養育する傍（かたわ）ら聞法と報恩行に一生を捧げ、いかに忙しくても、法座があると聞けば、何はさしおいても参り、仏法の用事となれば、全てを抛（なげう）って奉仕すると言った調子で、全く仏法一途に生き抜いた同行でありました。

あるとき人が、シズ同行に向かっていうには「あなたは多くの子女を抱え、ご主人は、いつも勤めに出ておられるにもかかわらず、ようそのようにお寺参りや、ご報謝がつとまることですな！」

と。するとシズ同行が言われるには、

「私は世間の人たちがおっしゃるように、家の仕事を捨て、お寺参りをするのではありません。むしろお寺にお参りして、仏法を聞かせていただくことによって、はじめて家の仕事も苦なしにつとめさせてもらえるのです。もし仏法がなかったならば、到底この宿業の重荷を背負いきれまいと思います。私としましては仏法のために娑婆の仕事が邪魔されるのでもなく、身を打ち込んでやらせてもらえるのであります。云々」と。

全く仏法と世法とが、このシズ女の生活のうえに一枚となっているのを尊く思うとともに、父親の弥八同行が「仏法をいただかなかったら、人間に生まれた所詮がない」と言われた言葉が、娘シズ女の上に生きているのを痛感せしめられます。

（了）

（『安心清話』百華苑刊、より）

清沢満之先生に学ぶ ⑬

清沢満之先生の「一念」（『清沢満之先生の言葉』、永田文昌堂、十九頁）の文章（太字の部分）から少し詳しく学んでみます。

『一念』

「我々が若し将来に立っているものであるならば、宜しく将来を望み将来に憑るべきである。けれども我々は現在に立って居る。現在に立ち現在に生きているものが、将来を自分の立場として何の益に立つか。」

といわれます。私たちの全人生を支えてくれるものはないのか、という問いは誰しも問わずにはおれない問いです。ただそれを真剣に問うか、それともそういう問題があることは知っていても、真正面から努力して取り組まない。あるいはこのような問題に関心が無く他のこと、財産とか名誉とか会社の経営とかあるいは芸術や学問の才能を生かすとかあるいは娯楽や快楽などの世間の良きもの美しいものに心が向いて、全人生の揺るぎない基盤を求めようとしないかです。

しかし私たちはこの世間の中に生きているかぎり、人生においてさまざまな不安やむなしさやおびえの心（感情）が起こって止みません。

ですので、時が熟すと、真の安らぎがほしい、生きる意味を求めたいと願い、全人生の確実な支えを求めざるを得なくなってきます。これは人の心の奥から湧き上がってくる願いで、それを宗教心とも菩提心ともいいます。

この問題に関して、自分の根本的な支えを、今ではなく「未来に」予想して求めるのは誤りであるといわれるのです。なぜならば、私が活きている事実はいつでも今ここにしかないのであって、将来にそういう支えを望んでいてもそれは当てにならないといわれるのです。人間のいのちはいつでも現在ただ今にしか実際にはないからです。ですので当てにならない将来に期待しても、それは今の私の益にはならないといわれます。当然ですね。次に

現在が続いて将来となる。然るに将来を望みて現在に見ぬものは、現在を捨てて将来に立とうとするものである。その人の精神は現在に於ては少しも立場を持っておらぬ。現在に安住する基礎を持って居らぬ。

といわれます。まことにその通りで、未来といっても「現在ここにいる」という事実の上での頭の中で、未来を「思っている」にすぎません。未来というものが実在するのではありません。未来というものも、現在が続いていっている外にはありません。たとえば一年先といっても、今は「一年先の時」ではありません、現在にしかいません。未来と言うが、その時は、その時の「現在」でしかないのです。そうするといっても実際に実在するのは、現在のここの事実だけです。この現在において安住する立場を持たねばなりません。

然るに世間の事変は現在に襲来して止まぬ。その人はどうして之に当ることが出来ようか。その人は当然躓き倒れ苦悩煩悶し、遂に人を怨み天を呪わねばならぬ。かく現在に在って苦悶している者が、何時安寧満足の地に進むことが出来るであろうか。極めて覚束ないことである。

私たちはとかく現在を大事にせず、「今はダメであるが、やがてうまくいって幸せになるだろう、もう少しがんばろう」などと未来に期待し、未来に希望を持つのですが、そう思っている「現在に」、次々といろいろな現象、事柄が起こってきます。都合のよいことばかりが起こってくるのではありません。むしろ都合の悪いことが起こることが多いのが人生です。**「世間の事変は現在に襲来して止まぬ」**のであって、今ここに容赦なく出来事が起こってきます。それで人は苦悩し煩悶し、人を恨み世を呪って「なんでこんな目にあうのか」などと嘆くのです。都合の悪いことが次々と現在に起こってくるのがこの世のすがたです。そういう苦の事象はいつでも現在に起こってくるのであれば、人生に真の安らぎを得ようと思うなら現在において、真の支えを見いださなくてはなりません。そこで、

我々はかような誤りに陥らず、脚下を固めねばならぬ。いかに外界の襲撃が激しくても、決してそれがために崩されない堅固な基礎を固めなくてはならぬ。即ち我々は現在の一念を確固にせねばならぬ。。

と仰せられるのです。現在ただ今を「固めねばならぬ」のです。「いかに外界の襲撃が激しくても、決してそれがために崩されない堅固な基礎を固めなくてはならぬ。即ち我々は現在の一念を確固にせねばならぬ」のです。要するに現在のこの一念を「確固にせねばならぬ」のです。

一念というは何であるか、ひとおもいである。この現在のひとおもいを堅固にせねばならぬ。遠き将来を望まず、遙かな行末を憑(たよ)らず、唯この現在の一念に極めて確かなる基礎を与えねばならぬ。

では現在の一念ということですが、一念とは一瞬ということです。ここでは「ひとおもい」といわれます。その「ひとおもい」を堅固にしなければならない。堅固にするとは確かな基礎を与えねばならないのです。ではどうしたらよいかといっても、一念は常に変動します。

けれども、これがなかなか容易なことではない。何故かと言えば、吾々の精神は常に動き通し変り通しであるからである。この転変して止まぬ精神に、どうして不変不動の立場を与えうることができるであろうか。

どうしても今のここに絶対に動かない不変不動の立場を持たねばならない。これに依らなくてはならない。心（精神）は動きどうしであり変化して止まないし、この心の一念を消すわけに行かないし、固めることもできない。どうしたら不変不動の立場を与えることができるか、これが大きな問題なのです。

これを為すには、吾々の精神の憑(よ)り所を求めねばならぬ。吾々の精神が転変するものに憑(たよ)っておれば、吾々の精神も転変する。若し吾々の精神にして全く変動せぬものに憑(たよ)っておれば、吾々の精神も変動せぬ。

私たちの精神の依り処、心の支え、一念の心の依り処が、もし変動するものであれば、精神も変動します。それゆえこれは支えになりません。この一念をどうして全く変動しないものに依らなければなりません。

然るに此(この)世に於ける相対有限の事物は悉く変動する。従って此相対有限の事物によって成立っている知識や感情や意志などは悉く変動する。

この世における相対有限なものとは、たとえば身体、これは生まれてしばらくは健康体でも老化し、病気になり、そして死を免(まぬが)れません。また住居も新築するとそこから同時に古くなりはじめます。財産も増減し、親も子もいつまでも一緒にいることはできません。環境も同じです。自然環境は日々変化しています。社会環境である政治も体制も同様で、平和になっても一時的で、また戦争が起きるがまたおさまり、また動乱します。そして相対有限の知識も考えも感情も意欲も動きどうしであり、変化しづめです。どれも変動するものであり、それら一切は私を支える不変的な基盤になりません。

従って吾々の現在の一念をして極めて確固たるものに為そうと思わば、是非とも相対有限の事物を頼りにしてはならぬ。今一歩を進めて絶対無限に憑(たよ)らねばならぬ。絶対無限の存在は永久に不変不動である。この存在に憑ることによって始めて安住の地に立つことができるのである。

であれば、現実である今ここの私を支えるものは、変わりどうしの有限相対のものではたよりになりません。

ではどこに不変不動の立場を見いだすことができるでしょうか。これは幸せを真に求める者にとっては解決しければならない人生の一大事です。

清沢先生は現在の一念の確固たる依り処を、移り変わって止まない相対有限なものに求めてはならないといい、それを絶対無限に求めなければならない。絶対無限こそ不変不動の人生の依って立つ安住の基礎であるといわれるのです。ではその絶対無限をどこに見いだすのかという点ですが、清沢先生は、

但し、この絶対無限の体は相対有限の事物を離れて存するのでなく、恰も波が水に離れぬ如く、この体は差別の事物さながらに存するのである。

従って吾々の精神に於ても、変り動くところの精神さながらに不変不動の一念を得るのである。決して変動する心を捨てて不変不動の一念を得るのではない。常に転変して止まぬ世に処しておりながら、又転変して止まぬ心を持ちながら何時も不変不動のおちつきを得るのでなくてはならぬ。

ここで清沢先生は、絶対無限をどこに見いだすかに

ついて、ほかではない、相対有限の事物を離れない処に見いだすのであるといわれます。それはちょうど波（有限）が大海の海（無限）を離れぬように、移り変わりする一念に即して不変不動の一念（今）を得るのだといわれます。変動する心を離れて得るのではなく、変動する今ここに不変不動を得る。転変する世に処しつつ、転変しない場所を知らしめられ、そこに落ち着きを得るのだといわれます。動く事象に即して動かぬ場所を知らされるのです。

実は現在・現在の一瞬は絶対無限のはたらきと一つなのです。有限なものは有限なもの自身で存在することはできません。目の前に一本の樹が立っているという事実は、無量の空間いわばこの宇宙があり地球があり大地があり、大地があって一本の樹木が立つことができるようなものです。

今ここにいる私のいのちは、現在ただ今空気から太陽から地球、さらに宇宙など無量無数のいのちのはたらきがなければ存在し得ません。Ａは「Ａならざる一切の非Ａ」がなくては成り立たないのです。これを仏教では縁起の道理といいます。

「今ここにいる」ことができるのは、無数の物によって可能です。その無数の物のはたらきを成立させている根底的なはたらきが無量のいのち（寿命無量）であります。このいのちのはたらきを離れて人は存在できません。物質的な存在だけではなく、意識のはたらきも、それを成り立たしめているのが絶対無限のいのちのはたらきです。このいのちのはたらきの中に意識の活動領域があり、それによって、小さな私の心のはたらきも生まれてくるのではないでしょうか。心は目に見えずつかまえどころがありませんから、外の現象を見るように捉えることはできません。このような広い深層の意識を心理学では集合的無意識などといい、仏教ではアーラヤ識などといいます。

私たちはこうしたはかりないいのちにおいて存在しているのですがそのことを知らず、その事実に背き、この事実から浮き足立ち、これを忘れておびえており、不安な中で暮らしています。

しかし、はかりなきいのちは常に「私たちとともにあります」。このことを南無阿弥陀仏の一声のお念仏において、「我（仏）、汝とともにいる」と聞かされるのであります。ここに「大悲の阿弥陀仏が私と共にあります」と知らされます。こうして不安な人生のただ中に居り場を与えられるのです。お念仏において阿弥陀仏にであうと、自分の閉塞された「思い」を超えている大悲のいのちにであい、「ああ有り難い」と、大悲のお心を感じざるを得なくなります。はかりないいのちの中に大悲のはたらきがあるのです。寿命無量の中に光明無量いわば大悲の智慧のはたらきがこもっているのですね。この大慈大悲の阿弥陀仏が私たちを救う阿弥陀仏です。（了）

住職雑感

先月二十二日は午前・午後と念佛寺永代経の法要を行う。毎年この日に行う。午前は私と孫それに参詣者（８人ほど）が共に『仏説阿弥陀経』を読誦。孫は大学の４回生で真宗学を学んでいる。最近は少しずつ手伝いをしてくれる。法話は、真宗のお説教には現在大きく分けて三種類（信心正因・称名報恩説。念仏往生・信心正因説。清沢教学を通した大谷派の近代教学）の流れがあり、どこからその違いができたのか、またどこに共通性があるかなどを話す。午前にお参りされ方は長年聴聞をされている方ばかりであるから、やや専門的なお話をした。午後は、副住職と久保田師と孫の４名が参詣の方々と共に正信偈三首引きを唱和する。参詣のお方に焼香をしていただく。四国から同い年の従兄弟夫婦や知友の栖雲師が数年ぶりに来て下さり、それに名古屋からのご夫婦あるいは初めての方などを含めて二十数名のお参りであった。法話は宗教の必要性と清沢満之の教えについて語った。久しぶりに遠方から来られた方々と個人的にいろいろとお話をお聞きしたかったが時間がなかったのが残念であった。

先日アメリカ大統領のトランプから、イランへの軍事的制裁に日本も協力せよという要請があった。それをどう断るかで、「日本は憲法第９条で海外に出兵することは禁止されているから、申し訳ないがお断りする」ということで高市総理は断ったのではないかと勝手に想像する。もしこの第９条を廃止し「世界に事あれば、正義のために日本の自衛隊を派遣する」ことが可能になるなら将来、日本は世界の戦争に巻き込まれる可能性は大いに出てくる。安倍政権の時に新たな安保法制ができ、日本の国益が大きく損なわれ日本が危なくなると海外出兵もやむを得ないという風に変更になったが、憲法第９条が削除され、「世界の正義のために出兵も可能である」というようになると、日本は「日米安保条約」によってアメリカに負い目があるから出兵もやむを得なくなるのではなかろうか。政治に無知な私の勝手な解釈かもしれないが。（了）